

ホウレンソウの栽培法

2011/10/13

タネまき

一般にはすじまきをする(※1)が、1㎡あたりの種子量は10～20mlで、夏まきでは(発芽しにくいので)やや多めに、春まきは(トウ立ちしないようにするため)やや少なめがよい。ホウレンソウの発芽適温は20度以下(他のアブラナ科よりかなり低い!)なので、夏場は発芽するには苛酷な環境なのである。従来は水に浸して行う催芽処理が勧められていたが、最近の猛暑の影響で(予想以上の高温乾燥のため)逆に失敗する事例が多い。また、ブラッシングなど種子に傷をつけたり、薬品で処理したりしてある種子が最近が多いので、催芽処理せずに、十分灌水した畑にそのまま播種したほうが失敗が少ない。むしろ、家庭菜園では9月中旬以降涼しくなってから種まきを始めるのが賢明である。気温の下がった秋以降～春蒔きまでは、水分だけ注意すれば、ホウレンソウはきわめて発芽しやすく作りやすい野菜である!タネまき後は0.5～1cm位の土をかぶせ、軽く上から押えて種子が土壤水分を吸収しやすいようにする(また地下の水分が種子近傍に集まる効果も期待できる)。その上に切りワラやモミガラなどを敷き、乾燥やたたき雨による被害を防止する。

(※1)図2の下段:マルチをして点まきをしてもよいが、不ぞろいになりやすいので注意

施肥

法蓮草は酸性土壌に弱いことで有名で、酸性土では、ほとんど生育せず赤葉となって枯れる。したがって石灰で中性化することがまず必要である。酸性の程度によって加減するが、苦土石灰200～300g/㎡(通常野菜の倍以上)が適量である。つぎに、その石灰や肥料が有効に働くように完熟堆肥も必須であり、牛フン堆肥などで1～2kg/㎡は最低必要である。以下は肥料であるが、成分量で、窒素20～25g、リン酸10～15g、カリ10～15gが標準となる。8:8:8の配合肥料で計算すると、約200g/㎡程度は元肥として必要となる。追肥は生育状況を見て窒素主体の速効肥料や液肥で与えるのがよい。

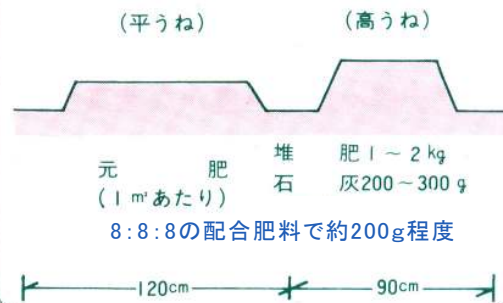
収穫

冬本番のホウレンソウは無農薬でカンタンに栽培できる野菜である!

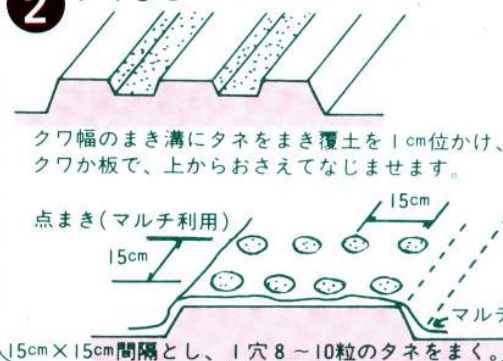
夏まきでは葉数が8～10枚、秋まきで15～20枚の頃が適当で、大きいものから間引き収穫をしてゆけばよい。(九州では夏場で1ヶ月、秋で1.5ヶ月、晩秋以降で2ヶ月以上が播種後収穫までの標準栽培期間である。)

日本種苗協会長崎県支部/市川種苗店
※一部又は全部の引用を禁止いたします

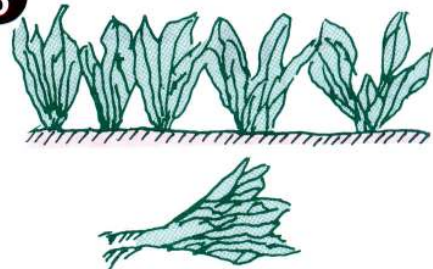
1 うね作り



2 タネまき



3 間引き、収穫



本葉出始め、本葉4～5枚の頃に密生部を間引き。本葉15枚(夏は10枚)位になれば、間引きながら収穫する。